

Title	Ruine, jardin et retraite dans l' 《utopie romanesque》 de George Sand
Author(s)	高岡, 尚子
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44115
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	高岡 尚子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 17462 号
学位授与年月日	平成 15 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科仏文学専攻
学位論文名	Ruine, jardin et retraite dans l'《utopie romanesque》 de George Sand (ジョルジュ・サンドの小説空間内ユートピアにおける廃墟、庭、隠遁)
論文審査委員	(主査) 教授 柏木 隆雄 (副査) 教授 内藤 高 助教授 和田 章男 大阪府立女子大学人文社会学部助教授 村田 京子

論文内容の要旨

本論文は 19 世紀フランス文学において巨大な足跡を残したジョルジュ・サンドの文学宇宙の中に特徴的に現れる「ユートピア的世界」に注目し、「廃墟」と「庭園」そして「隠遁」がサンドの「ユートピア的世界」を構成する基本的な要素であることを、作品を精密に分析することによって明らかにし、従来理想主義的な社会思想に裏打ちされた素朴な田園小説家として、その知名度のわりに日本では分析研究の少ないその文学の本質に迫ろうとした労作。5 部構成で、序章、結論、参考文献を含め全文フランス語で A4 版 313 頁の大冊である。

第 1 部「ジョルジュ・サンドの『小説空間内ユートピア』」は、「ユートピア(小説)」の歴史とその共通する特徴を述べ、サンドのそれが、1. 小さな家族的集団を扱い、2. 読者と同一の生活空間に構築されている点でそれらと異なると指摘。また従来の「ユートピア小説」が社会機構変革の図式があるのに反して、彼女の「小説空間内ユートピア」は具体的青写真がない。作家的成熟が増すにつれて社会主義的哲学に裏打ちされた未来像が具体的になるが、サンドの世界の特徴は「自然」との親和にあり、「自然」を排除しようとする傾向を示す他の「ユートピア小説」とこの点でも異なる。そして「ユートピア小説」が人間の「愛」を可能な限り排除するのに対し、サンドはまさにその「愛」によってその世界を統合しようとし、試行錯誤しつつ、それを構築していく過程が重視されるとする。

第 2 部「廃墟。破壊か再建か」は、「ユートピア」の概念とは一見相容れない「廃墟」が、サンドにあって積極的な役割を果たすことを説く。19 世紀ロマン派好みの「廃墟」は、サンドにあって、初期の崩れゆく精神(肉体)と呼応する場所として描かれていたが、1840 年代以降影を潜め、「自然」の回復力を示す幸福な場所に変貌する。廃墟は蘇る自然回復と再建の意志を発揚させ、若い男女の愛を生む場所ともなる。廃墟は崩壊の場であればこそ、再生をうながし、新たな世代に向かっての希望を育むのだ。廃墟の崩壊によって得られる再生にサンドの積極的な意図を論者は読みとっている。

第 3 部「庭。閉鎖か開放か」においては、サンドにおける「庭」のイメージが追求される。庭は個人的な場所であり、所有者の富や美的感覚などを明確に示す。また「自然」の人工的模倣という面もある。個人的に閉じられた庭は、外部の人間にとって好奇心の対象であると同時に、疑念の対象にもなりうる。所有地内でありながら、建物の外にある庭の内・外両面を持つ性質を、サンドは秘められた愛を描くのに活用する。サンドの作品に描かれるさまざまな庭

は、初期作品から後期にいたるまで、個人の理想を反映する場所として一つの楽園として機能しているのである。

第4部「隠遁。個人か集団か」においては、初期作品には外界を嫌悪の対象として完全に逃避する「隠遁」が多く見られる。閉ざされた空間の中に個人的な自己完結を許すユートピア的生活や、世俗的価値観から解放されて内向によるエネルギーの蓄積をはかる存在など、「隠遁（所）」は、ユートピアの実現にふさわしい人格形成のための修行の場と読むことができる。ヒロインたちは処女マリアの如く「純粹無垢」のままにある。サンドは思想の修練のための理想的な場としての隠遁を説き、外的自然と内的自然の融合を計り、純粋な精神に導かれる理想的な集団運営機構が確立された状態での「ユートピア」を提示するのだ。

第5部「幸福を求め道なり」は、空間の分析から時間の分析へと移る。サンドの理想社会は、過去・現在・未来という時間軸をすべて「未来」の位相に集約する。そのユートピア状態は、未来において実現されるのであって、それは「子どもたち」においてなされる。サンドが描く理想的な庭の地平線にまで広がる一見不自然な配置が、ユートピアの拡大を象徴的に表現するように、時間においても進歩する未来を彼女は信じ続けていた。その進歩を支えるのが過去からの記憶とエネルギーを蓄える素朴な田園人とされ、そこにサンドの最も独創的な着想が示される。彼女が強く求め、最重要の規範とした「友愛」は、そのユートピア社会の象徴的な真理であり、サンドにとっての理想状態を提示するもっとも具体的かつ示唆的なイメージこそ「廃墟」「庭」「隠遁」であって、それらは時代とともに変化しつつも、根本において変わらない理想的な位置づけを強調して結論にいたる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ジョルジュ・サンドの作品に見られる「ユートピア的思想」に関して、彼女のほぼ40年にわたる創作活動を詳細に検討して、その40年を貫く根本的なイメージとして「廃墟」「庭」「隠遁」の3つを指摘、それぞれの要素について、初期の『アンディアナ』から中期の『魔の沼』や『愛の妖精』で知られる田園小説。さらに『黒い町』や『メルカン嬢』にいたる後期の作品までを具体的に分析、説明して、サンドの理想主義的世界の構築にきわめて重要な位置をしめることを明らかにしたものである。

サンドの小説は平淡で単純な筋立てと風景描写に味わい深い特徴があるが、それは同時に深い分析を困難にさせる作風でもある。論者はこの困難を、「廃墟」「庭園」「隠遁」の三要素がサンド文学の全体を貫く太い糸として抽出、従来から言われているその「ユートピアの世界」を具体的に、構造的に分析して、それらがサンドの思想、文学を解くきわめて重要な因子であることを明らかにした点にこの論文の第一の価値がある。論文の要旨説明では紙幅の関係で具体的な作品を個々にあげて証することができなかったが、彼女の膨大な作品を丁寧に取り上げて、いちいち該当する箇所をあげ、登場人物を分析していることも評価したい。とりわけ第5部の時間論は傾聴に値する見解も多く、女性の再生機能に注目している点など、今後のサンド研究に資すると思われる。

しかしながら、論述全般を通してみると、不満な点がないわけではない。全体に叙述がやや冗長に過ぎ、サンドの小説を語ることに比重がかかって、サンドの周辺や歴史的動向についての記述が少なく、その点でサンドの独自性を十分に論じ切れていない印象を与えた。とはいえ本論はむしろサンド世界を三要素によってくっきりと輪郭づけようとしたもので、これらの欠点は成果を公刊する際に自ずから解消されるはずのものだろう。したがって、本論文を博士（文学）にふさわしいものと認定するものである。